

高品質・良食味米生産で消費者に喜ばれる米づくり

月別作業項目 栽培の要点

3月	中	播種準備	床土の準備	○塩水選					
	下		塩水選	種粉 比重 水10ℓ当りの食塩量					
上	種子消毒		うるち 1.13 2.0~2.1kg						
4月	中		育苗期	催播	葉もち・初期害虫防除(箱施用)				
	下			畦畔の補強					
上	本田施肥								
5月	中			活着期	代かき	除草剤散布			
	下				除草剤散布				
6月	上				分けつ期	ドロオムシ防除(多発時)			
	中					残草対策(7月上旬)			
下	葉もち防除(水面施用)								
7月	上					穂首分化期	葉もち早期発見・早期防除		
	中	幼穂形成期の確認							
8月	中	幼穂形成期					追肥	畦畔草刈(カメムシ対策・出穂2週間前まで)	
	下						幼穂形成期深水かんがい(10cm10日間の実施)		
9月	上		穂ばらみ期				低温時深水(15~20cm)	稲こうじ病防除(出穂10~20日前)	
	中						ノビエの抜き取り(カメムシ対策)		
10月	上						出穂開花期	高温時は間断かんがいで根腐れ防止	穂もち・紋枯病防除(出穂直前)
	中			低温時には深水で登熟促進				穂もち防除(穂揃期)	
10月	下			登熟期				間断かんがい	カメムシ防除(残効性の高い1回散布剤を基本)
	上				栽培日誌提出(8月31日まで)				
10月	中				収穫・調製			落水	カメムシ追加防除(多発時)
	下							適期刈取	
10月	上					収穫・調製		乾燥	乾燥
	下							稲わらすき込み	製

青天の霹靂

栽培基準

- 土壌診断に基づく土壌改良(ケイカル・ようりん施用等)
- 農業使用成分「10成分」以内
- 種苗の譲渡と自家採種の禁止
- 栽培管理記録の記帳(栽培日誌の提出)

出荷基準

- 検査等級 1・2等
- 玄米タンパク質含有率 水分15%換算 6.4%以下

特性比較一覧表

項目	まっしぐら対比	はれわたり対比
草丈	並	み
葉色	並	み
幼穂形成期	並	み
出穂期	2日程度遅い	1日程度遅い
成熟期	並	み
稈長	やや長い	並
耐倒伏性	やや弱い	やや弱い
葉もち病	やや強い	やや強い
穂もち病	やや強い	並
収量性	やや少ない	やや強い

※KSK28は幼穂形成期~出穂期までに流し込みすると、タンパク値抑制と増収が期待できる。ドローンでの葉散布も可能。(KSK28はケイ酸室資材のため化学態窒素制限はありません)

栽培の注意点

施肥

- 基肥を6kg/10a程度、追肥は乾田で2kg/10a、半湿田では1kg以内を目安とする。
- やむを得ず湿田で作付けする場合は、生育量確保と生育後半の土壤窒素発現量を考慮し**基肥重視**とする。
- 施肥方法は原則として追肥1回体系とする。
- 追肥は幼穂形成期とし、それ以降は行わない。
- 生育後半に土壤窒素発現量が多い水田は「無追肥」とする。
- 復元初年目の水田では施肥による生育コントロールが困難なので、作付しない。

刈取適期

- 出穂後積算気温で900~1,100℃とする。
- 刈遅れると胴割れ米による落等が懸念されます。

育苗

◎種子消毒(例)

薬剤名	処理法(低濃度)
テクリードCフロアブル	200倍液に24時間漬ける(種粉20kgで水20ℓに薬剤100mℓ)
スポルタック乳剤	1,000倍液に24時間漬ける(種粉20kgで水20ℓに薬剤20mℓ)

・浸漬中は2~3回攪拌する。

◎浸種

水温10℃: 10日
水温15℃: 6~7日

◎播種量(箱当たり)

乾粉	催芽粉
100g	約125g

◎催芽

30~32℃で16~20時間加温

◎苗立枯病防除

薬剤名	箱当たり施用量
タチガレエースM粉剤	8g
タチガレエースM液剤	500mℓ(500~1,000倍)
ナエファイン粉剤	8g
ナエファインフロアブル	500mℓ(1,000倍)

◎温度管理

生育時期	日中	夜間
育苗箱設置~出芽期	35℃以下	10℃以上
出芽期~1.5葉期	30℃前後	5℃以上
1.5葉~3.0葉期	25℃前後	
3.0葉期以降	20℃前後	

施肥

◎窒素施肥基準量

品種名	湿田	半湿田	乾田
まっしぐら	7~8	8~9	9~10
はれわたり	6~8	8~9	9~10

(窒素成分総量kg/10a、堆肥1t/10a)

◎施肥体系

	窒素施肥基準量に対する割合	追肥時期
追肥1回体系	基肥70~80% 追肥20~30%	幼穂形成期
追肥2回体系	基肥60% 1回目 追肥20% 2回目 追肥20%	1回目: 幼穂形成期 2回目: 幼穂形成期の10日後
全量基肥体系	追肥1回体系または、追肥2回体系の窒素総量(基肥+追肥)の5~10%減肥。	追肥はしない

水管理

生育期	寒い日の水深	普通~暖かい(暑い)日の水深
活着期	4~5cm程度(冠水しないように)	2cm程度
分けつ期	5~6cm程度	3cm程度
有効分けつ終止期	5~6cm程度	中干し
幼穂形成期(深水かんがい)	10cm、10日間	
穂ばらみ期	15~20cm	4cm程度(時々水の入れ換え)
出穂開花期	10cm程度	5~6cm程度(時々水の入れ換え)
登熟期	10cm程度	2~3cm程度(湿田などでは間断かんがい)
落水時期	湿田は出穂後20~25日、乾田は出穂後30~35日	

本田の土づくり

項目	10a当たりの施用量	主な効果
ケイ酸資材(KSK28)	1.4kg	収量向上、病害虫への抵抗性向上、耐倒伏性向上
ケイ酸資材(珪カル等)	80~100kg	
りん酸資材(ようりん等)	20~80kg	生育安定化

※土壌診断結果に基づき必要な成分・量だけ施用する。

発生に注意する病害虫

- 薬剤散布時には周辺作物に飛散しないよう十分注意する。
- 農業の使用に当たっては水系への流出を防ぐため、**散布7日間**は落水、かけ流しはしない。

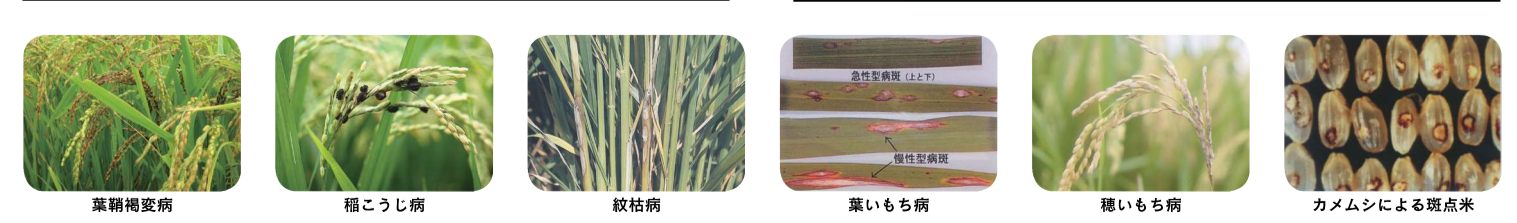
葉鞘褐変病	○低温・多湿条件下で発生しやすく、穂ばらみ期~乳熟期に多雨または曇天が多いと多発する。 ○穂ばらみ期に感染すると不稔歩合が多くなり、青米・茶米等が増加する。 ○発生を予測するのは困難であるが、薬剤防除は水と剤または粉剤を穂ばらみ期初期~出穂初期に散布する。
稲こうじ病	○前年発生が見られたら、出穂10~20日前に必ず防除。
紋枯病	○出穂期以降の高温多雨や多肥栽培で発生が増える。 ○出穂直前に茎葉散布を行う。多発生が予想される場合や例年発生が多い水田では穂揃期にも散布する。
いもち病	○補植苗は早めに処分する。 ○葉もちを見つけたら直ちに薬剤散布する。 ○葉色の濃いところ、露がなかなか消えないところは要注意、早期発見が基本です。 ○穂もちの出穂直前と穂揃期の2回防除する。 ○最低気温18℃が2日以上続いた場合や、最低気温が16℃以上に達して朝露や霧の晴れない日が続いた場合に感染しやすい。
カメムシ類	○発生源となる休耕田や畦畔、水路の除草で密度低下。 ○薬剤散布はなるべく広域一斉に行う。 ○キラップ剤は 穂揃期~7日後 、ダントツ剤・スタークル剤は 穂揃期7~14日後 に茎葉散布。 ○例年発生が多い水田や、登熟後期に発生が多い場合は最終散布の7~10日後に追加防除をする。

適期刈取

品種名	出穂後積算気温(℃)	籾の黄化程度
まっしぐら	960~1,200	圃場全体の籾が90%程度黄化したとき
はれわたり	970~1,300	

乾燥・調製

玄米水分	米選機の網目	整粒歩合
15.0%	1.9mm	80%以上



JA米の要件: ① 種子更新100% ② 水稻栽培日誌の記帳 ③ 農産物検査の受検